自　己　評　価　表

（愛媛県立北宇和高等学校三間分校）
学校番号（ 43 ）

教育方針	校訓「協和・責任・健康」の精神に基づき、豊かな人間性と社会人としての資質を備え、地域文化の創造と産業の発展に貢献できる人材を育成する。	重点目標	「一人一人のよさを見つめ伸ばす教育の実践」 ～ 社会的自立力の育成を目指して ～

領域	評価項目	具体的目標	評価	目標の達成状況	次年度の改善方策
学校経営	地域との結びつきを大切にした教育の実践	地域の教育力を生かし、地域行事やボランティア活動への一人１回以上の参加を目標とする。 評価基準Ａ　95%以上　Ｂ　80%以上　Ｃ　70%以上　Ｄ　50%以上　Ｅ　50%未満 ホームページの適時更新、家庭通信の発行により、中学生、保護者や地域住民等への情報発信を積極的に行う。	B	今年度もコロナウイルス感染症拡大の影響で、地域行事や各種のボランティア活動が縮小されたり、中止となったりしたものもあったが、三間町納涼大会や中山池公園のポピー定植など復活した行事もあり、積極的に参加することができた。農業機械科では小学生との交流事業、チューリップ街道の球根植え、コスモス畑の耕うんなどを行い、地域との交流を深めることができた。また、中山池イルミネーションの飾り付けボランティアについては、本校生徒とともに参加するなど本校と協働したボランティア活動を実施することができた。ただ普通科生徒のボランティアへの参加が少なく、課題として残った。	総合的な探究の時間を活用し、地域との結びつきを大切にした教育活動を展開したい。また、普通科生徒のボランティア活動の参加について、生徒会、家庭クラブ、農業クラブを中心に積極的に呼びかけ、働きかけていきたい。
	働き方改革の推進	教職員がそれぞれの個性を発揮し、生き生きと活躍できる職場環境を整備する。 ＩＣＴを活用し業務の効率化を図り、勤務時間外在校等時間の削減を目指す。１か月の勤務時間外在校等時間が45時間以上の教職員数０を目指す。 評価基準 Ａ 0人　Ｂ 5人以下　Ｃ 10人以下　Ｄ 15人以下　Ｅ16人以上	C	教職員に対するストレスチェックの結果から、本校教職員のストレスについては、県平均と比較しても少ない状況となっている。教職員一人一人が、ワークライフバランスをとりながら個性を発揮し活躍できていると考えられる。 勤務時間外在校等時間については、45時間以上の教職員数は7名前後となっている。ミドルリーダーの平日の残業、担任や農場日直等で土曜日、日曜日の指導を行っている教職員の時間数が多くなっている。	引き続きＩＣＴの活用を今年度以上に充実させ、業務の効率化をさらに推進していきたい。 働き方改革を推進していくためには、教職員の意識改革を行うことが不可欠である。時間外労働時間を削減することが、教職員のストレス軽減につながり、より効果的な教育活動を行うことが可能になることを研修等を通して周知していきたい。
学習指導	学習習慣の確立	進路意識や目的意識を持たせ、学習意欲の向上を図り、授業と家庭学習との学習サイクルの習慣化を図る。また、ＩＣＴの活用により、家庭学習の充実に向けて、課題設定の工夫改善を行う。一日２時間以上の家庭学習習慣の定着を目標とし、学年、学級で学習時間の増加に向けた取組をする。 評価基準 Ａ ２時間以上　Ｂ １時間30分以上　Ｃ 1時間00分以上　Ｄ 30分以上　Ｅ 30分未満	B	各考査前に家庭学習時間調査を行った結果、全校平均94.1分であった。マニフェストで設定した１日２時間の目標時間を大きく下回っているが、昨年度よりは増加することができている。感染症予防における生活スタイルの変化は学習習慣にも大きく影響している。教員側でより効果的な学習、主体的な学習につながるように授業計画および学習改善・指導改善に努めている。	学習への目的意識を高めるとともに、授業→家庭学習（復習・予習）→授業のサイクルを習慣化できるように、授業の満足度を高めるとともに、学習課題の工夫改善を継続する。 進路意識等を高め、学習課題への取り組ませ方を工夫し、えひめICT学習支援システムを活用するなど、ICTを活用しながら、学習改善につながる取組を進めていきたい。
	読書指導の充実	SHR時に読書タイムを設定し、読書する習慣を身に付けさせる。 図書委員会活動を活性化させ、興味、関心を高めるために図書館の環境整備を図る。 評価基準（月平均の図書館利用日数） Ａ 10日以上　Ｂ 5日以上　Ｃ 3日以上　Ｄ １日以上　Ｅ 0日	B	読書タイムの実施や、教科内での図書館利用指導や感想文の作成等を通じて、図書館利用を推進したり、図書委員による図書紹介を行ったりした結果、図書館利用者が増加した。本の整理を行い、利用しやすい環境つくりに努めた。	引き続き、日常の図書委員の活動を地道に行い、読書の面白さをアピールするようにするとともに、癒し空間としての存在価値を持たせられるようにしたい。
	教科指導の充実	課題の発見・解決に向けた主体的・協働的な深い学びの視点に立って、主体的・対話的な授業形態や授業方法等の工夫・改善を図るため、教員のスキルの向上に努める。 よく分かり、学び合う授業を実践して、生徒一人一人の良さをみつめ伸ばす教育を推進する。 観点別による学習評価を行い、学習改善につなげる。 評価基準（ICT活用・授業改善研究授業・研修会等実施） Ａ ４回以上　Ｂ ３回　Ｃ ２回　Ｄ 1回　Ｅ ０回	A	今年度は学校訪問研修、人権教育総合推進地域事業研究発表会などがあり、例年よりも指導内容の検討を十分に行うことができた。また、生徒に一人一台端末が配布され、生徒が端末を活用することが日常的になった授業の取組ができている。家庭でも課題に容易に取り組むことができ、これまでの学習を改善する取組ができている。教材の提示だけではない、教師と生徒の双方向のやり取りも実現できている。	えひめICT学習支援システムが導入され、より生徒の学習状況の確認がしやすくなっている。端末を活用して、生徒による主体的な学びや活動、共に学び合えるような授業形態や授業方法等の工夫・改善に今後も引き続き取り組んでいく。学習の成果物を集団で共有しながら学びを深める活動を取り入れていきたい。
	言語活動の充実	「話す力」、「聞く力」、「話し合う力」等を育成する場面を、教育活動全般を通して、意識的に数多く設定する。 ペア学習や班別学習等の協働的な場面を設定し、コミュニケーション能力の向上を図るとともに、深い学びにつなげる。 評価基準（成果発表会及び協働的活動の回数） Ａ ５回以上　Ｂ ４回　Ｃ ３回　Ｄ ２回　Ｅ ０～１回	A	総合的な探究の時間のみならず、各教科・科目において、協働的な学習や発表の場面を設定し、新たな課題を発見していく探究活動の過程を重視した活動がよくできている。多い生徒は５回を超える発表の機会があり、入学当初より大きく成長することができていると感じる。 今年度新たな取組として、地域活性化に関する学習を本格的に取り入れ、ふるさと愛媛学の講演会を行った。また、２回の地域探究講演会では、三間町の活性化について、グループに分かれ、意見を活発に出し合い、活性化案をまとめる活動を行うことができた。地域情報ビジネス部は、地域活性化について、フィールドワークを行い、地域コンテンツの開発に努め、また、三間米を生かした商品開発を行い、活動過程を今治で発表した。	総合的な探究の時間を中心に、「話す力」「聞く力」「話し合う力」等の育成に力を注ぎ、各教科にとどまらず、学年や学科を超えた活動に取り組み、コミュニケーション能力の向上につなげていきたい。 また、地域情報ビジネス部の活動として、三間町の活性化について研究を進め、三間分校が地域にとって必要な学校となり、高校生が活躍する姿を地域の方に見てもらえるようにしていきたい。

※ 評価は5段階(A:十分な成果があった B:かなりの成果があった C:一応の成果があった D:あまり成果がなかった E:成果がなかった)とする。

生徒指導	基本的生活習慣と規範意識の確立	さわやかで明るいあいさつのできる生徒を育成する。 生徒自ら、生活のリズムを作り出せるよう指導を繰り返し、安易な遅刻や欠席をなくす。 日頃から高校生らしい清潔で端正な身だしなみを心掛けさせ、身だしなみ指導では違反の繰り返しをなくす。	B	あいさつはできるが、声が小さい生徒が多い。授業での発言などの声も小さく、聞き取りづらい。ずっとマスクを付けている影響も考えられる。 身だしなみについては、一部の生徒に繰り返し指導を行ったが、ほとんどの生徒はきちんと制服を着こなしている。 一年生に欠席の多い生徒が見られ対処に苦慮した。	あいさつは社会生活の基本であるので、引き続き地道な指導を継続する。 欠席の気になる生徒は、連休明け、長期休業明けの対処をきめ細かく行う。
		授業開始のチャイム前に全員着席し、落ち着いた雰囲気で学習できるようにさせる。 校則や社会のルールを守ることで、自分や他人の命や心を大切にする意識を養う。 登下校時の交通事故０件、交通違反０件、携帯電話やスマートフォン等でのいじめ０件を目指す。	B	多くの生徒が、落ち着いて授業を受けることができている。 人間関係のトラブルはあったが、いじめと認定した事案はなかった。交通事故は１件で、休日の歩行中、車との接触であった。ケガもなく事故処理もきちんと対応できていた。	教職員が校則や社会のルールに対して、生徒に規範意識をきちんと持たせることの大切さを認識し、教職員全体で共通認識を持って指導することを心掛ける。
	生徒理解と家庭や地域との 連携の充実	個別面談を年３回以上実施し、生徒理解に努める。 家庭との連携を深めるとともに、教育相談体制を充実させ、生徒一人一人に寄り添い、きめ細やかな心の通う生徒指導の実践に努める。	B	予定していた面談を行い生徒理解に努めることができた。しかし、一部面談方法の変更を考えていたが、例年と同じものになり、その点は残念であった。 スクールライフアドバイザーの先生には、１、2年生全員を対象に面談の機会を設けていただき、ありがたかった。	生徒が様々な悩みを相談できるように、担任や学年にとらわれない面談の体制を検討する。 生徒理解のために、スクールライフアドバイザーと教員との連絡や相談を密にし、早い段階で情報を共有する。
		生徒の学校生活の様子を記録に残し積極的に公開すると共に、保護者や地域との連絡を密に取り、信頼関係を結べるよう努める。 ・ホームページの更新（授業外の生徒の活動） Ａ 月10回　Ｂ 月８回　Ｃ 月６回　Ｄ 月4回　Ｅ 月2回以下 地域の環境美化や行事への参加、お遍路文化の継承など、三間地域に貢献できる活動を充実させる。	B	担任を中心に保護者との連絡のやり取りは十分にできていると感じる。情報発信の中心であるホームページの更新もしっかりと取り組んだ。特に２学期後半は毎日のようにできた。また、新しくインスタグラムでの発信を始めるなど、他のツールへも取組を広げた。 生徒の地域行事への参加も、制限が少なくなり大幅に増えている。	担任を中心に引き続き保護者との連絡を密に取ることを心掛ける。 情報発信のツールそれぞれをうまく使いこなし、内容も充実させる。また、そのためにも一部の教員に負担がかからないように教職員全体で対応する。
	部活動等の活性化	部活動の改変や本校との連携を深め、生徒の要望にきめ細やかに対応することで、部活動に対する生徒の意欲を高めさせる。 ・部活動加入率90%以上 Ａ 90%以上 Ｂ 85%以上 Ｃ 80%以上 Ｄ70%以上　Ｅ 70%未満 ・部活動に対する生徒の満足度 Ａ 90%以上 Ｂ 80%以上 Ｃ 70%以上 Ｄ60%以上　Ｅ 60%未満 地域の特色に応じた部活動やその他の活動を活発化させ、生徒の活躍の場を広げる。	B	部活動の加入率は83%と昨年を下回った。３年生の加入率が低いことが原因である。今年の２年生の状況から考えると、来年度は上昇すると思われる。 満足度については、アンケートで部活動に加入している生徒の87%の生徒が満足していると答えている。 残念ながら県総体、県新人、高文際などへの出場はかなわなかった。ただ、文化部を中心に地道に活動をしている。 校外活動においては、積極的に参加している生徒が多く見られ、延べ人数にすると全校生徒が一人約1.5回ボランティアなどの校外活動に参加している。	本年度同様、生徒アンケートを利用しながら充実した部活動や校外活動になるように検討する。 また、生徒のニーズに答えた活動を充実させるために、教職員全体で対応できる体制を検討する。
人権教育	生徒の人権意識を深める活動の実施	人権・同和教育ホームルーム活動や生徒人権委員会の活動を充実させ、「人権だより」や「人権壁新聞」の発行を通して、人権意識の高揚を図る。	C	人権・同和教育ホームルーム活動では、各担任が十分に準備して取り組んだ。「人権だより」では、生徒の人権作品や、人権関係行事の振り返り等を紹介できた。「長島愛生園日帰り研修」で学んだことを、「人権だより」「人権集会」に生かすことができた。コロナ禍のため、「人権壁新聞」を作成できなかった。	「人権壁新聞」の内容を充実させる。「人権だより」に、生徒や保護者の意見を載せるなど、工夫する。「三間町日帰り研修」での学びを、人権関係行事等につなげる。
		全校面接や悩みに関するアンケートを実施し、学校が安心して生活できる場となるよう相談体制を充実させる。	B	悩みに関するアンケートにより生徒の悩み等の状況を確認し、全校面接等の面談を行い、より具体的な状況の把握と、助言等を行うことができた。さらに、必要に応じて、経過観察もできた。	生徒の心の悩みに対する指導・支援体制の一層の充実を図る。

※ 評価は5段階（A：十分な成果があった B：かなりの成果があった C：一応の成果があった D：あまり成果がなかった E：成果がなかった）とする。

進路指導	キャリア教育指導の充実	総合的な探究の時間（コスモスタイム）・課題研究の充実を図り、自己実現の意識と社会人としての実践力を高めながら、望ましい職業観・勤労観を育成する。 Ａ　十分な成果があった　　Ｂ　一応の成果があった Ｃ　あまり成果がなかった　Ｄ　成果がなかった	B	１年生就業体験、２年生進路探究、３年生進路実現と、それぞれの目標に向けた取組を行うことができた。さらに、生徒の主体的な活動につながるような工夫をしていきたい。	実践的な講座やワークショップを取り入れ。生徒が意欲的に活動する中で、社会的実践力を身に付けさせたい。
		生徒会、家庭クラブや農業クラブ、委員会活動において、一人一役以上を目標に、自主的・実践的な活動を展開し、自己有用感を育む。	B	少人数ということもあり、ほとんどの生徒が役員や委員会のメンバーに所属し、それぞれの立場で学校の活性化に寄与することができた。	生徒が主体的に活動し、自己有用感を感じることができる場になるよう各顧問や関係部署と連携をとりたい。
		生徒が自己の将来を見据えた生き方を考え、主体的に進路を選択できるよう系統的な指導計画を基に進路ガイダンスや面接指導を充実させる。 評価基準（進路ガイダンス実施４回以上） Ａ　４回以上　Ｂ　３回　Ｃ　２回　　Ｄ　１回　　Ｅ　0回	A	各学年に応じた進路ガイダンスを実施することができ、自己の進路を考える良い機会となった。また、今年度は新たに企業説明会も実施し、地元企業を知る機会も提供できた。	様々なガイダンスを通して、主体的に自己の進路を選択できるような支援体制を継続したい。
	個に応じた進路指導の充実	資格・検定の取得を奨励し、３年間で１資格（３級以上）以上の取得を目指す。目標に取り組む経験を通して、達成感を味わわせ、自信を育む。 評価基準（１資格以上の取得率） Ａ　100％　Ｂ　85％以上　Ｃ　75％以上　Ｄ　70％以上　　Ｅ　70％未満	A	今年度の３年生は、全員何らかの資格を取得しており、３年間で１資格以上の取得という目標を達成することができた。各教科担当による補習の実施等、生徒が前向きに取り組めるよう工夫していただいた。	資格取得のための補習の実施や資格の精選を行うなど、生徒が主体的に資格取得を目指せるような環境を提供したい。
		「３年生10人面接」等を通して進路意識を高め、卒業時の進路決定率100%を実現する。 評価基準 Ａ　100%　Ｂ　90%以上　Ｃ　80%以上　<u>Ｄ　75%以上　　Ｅ75%未満</u>	B	昨年以上に面接指導の充実を図り、事前・事後指導を徹底し、学年全体で進路実現へ向けて前向きに取り組むことができた。特別支援教育課や関係機関と連携をとりながら、生徒や保護者の希望する進路実現ができるよう取り組んだ。	３年間を見通したキャリア教育計画をさらに充実させ、社会的自立実践力を身に付けさせたい。そのためにも早い段階でキャリアプランを設計する機会を増やしていきたい。
安全教育と防災教育	学校安全体制の強化・充実	学校安全に対する意識を高め、災害発生時に的確な行動ができるよう、実践的･組織的な活動を充実する。 Ａ　5回以上　Ｂ　3回以上　Ｃ　２回　Ｄ　１回　　Ｅ０回	A	避難訓練、シェイクアウトえひめなど今年度も計画的に行った。宇和島市消防団三間方面隊の協力を得た防災行事や三間認定こども園と子ども文化選択生との合同避難訓練など地域と連携した防災教育を行うことができた。	地域防災の観点から、認定こども園、小中学校と連携した防災活動を計画したい。また、様々な状況を想定した避難訓練や豪雨・暴風雪などの自然災害を想定した防災教育などの工夫をしていきたい。
	防災教育の充実	防災意識の向上を目指すとともに、地域の防災活動や災害時の支援活動において、自らの役割を判断し、積極的に行動できる生徒を育成する。防災士講座受講者5名以上を目指す。 評価基準 Ａ　5名以上　Ｂ３名以上　Ｃ２名　Ｄ　1名　Ｅ　0名	A	今年度の防災士講座受講者は９名。そのうち、５名が合格し、４名が結果待ちである。宇和島、三間、松野地区の各地区に防災士の資格を持った防災リーダーの育成に努めることができた。	今後も各学年一人は、防災士の資格がとれるよう推奨していきたい。また、生徒の実体験学習などの工夫、防災士取得者が防災行事のリーダーとして運営など、自ら行動できる人材育成に努めたい。
	保健指導の充実	健康な生活を送るために必要な知識を身に付けさせ、自ら実践する力を養う。 心身の健康に留意させ、出席率94%以上を目指す。 評価基準 Ａ94%以上　Ｂ92%以上　Ｃ90%以上　Ｄ88%以上　　Ｅ88%未満	B	健康診断の結果、治療が必要な生徒に対して個別に保健指導を行い、健康に対する意識の高揚を図った。また、生徒保健委員会から、「朝食と睡眠」をはじめとした健康に関する情報発信を行い、文化祭では目に見える形で提示した。 出席率は92.3%だった。	健康や衛生に関する意識を高く持たせるよう、役立つ知識や最新の情報など精査して提供する。生徒保健委員会活動では、他の生徒に与える影響力を高められるよう、実践的な内容を取り入れるなど工夫したい。
特別支援教育	一人一人に応じた指導・支援の充実	発達障がいを含む多様な障害に応じた合理的配慮の整備を進め、一人一人の教育的ニーズに応じた指導・支援を充実させるとともに、インクルーシブ教育システムの構築を進める。 <u>校内研修の実施年１回以上</u>。 <u>通級による指導の充実を図る</u>。	A	ＩＣＴ機器の活用や視覚的教材の工夫がほとんどの教科で実施されており、ユニバーサルデザイン化された授業がインクルーシブ教育の完成に近づいていると思われる。また、校内研修では、教職員の自己啓発につながる研修を試み情報の共有と共通理解を深めることができた。	一人一人の教育的ニーズに応じた指導・支援を継続しながら、ユニバーサルデザインの考え方による合理的配慮や基礎的環境整備に努め、一人一人を見つめ伸ばす教育の実践を図る。
	自立と社会参加に向けた教育の充実	関係諸機関と保護者との連携の下「個別の教育支援計画」を作成し、校内においては全教職員共通理解の下「個別の指導計画」「自立活動の指導計画」の作成を継続的に行い、卒業後への切れ目ない支援の確保に努める。 校内の支援体制を充実させ、全教職員の特別支援教育に関する専門性の向上に努める。 <u>通級による指導において、自己理解と職業観を深めるための現場実習を年１回以上実施する。</u>	A	個別の教育支援計画や個別の指導計画の作成については、年々充実したものになっている。生徒・保護者と学校の合意形成の上で進路先へ提出するなど、切れ目ない支援体制づくりにつなげている。 通級による指導における現場実習も、進路実現に向けて効果的に実施できている。	障害のある者とない者とが同じ場所で共に学ぶことを追求しながら、自立と社会参加を見据えた体制づくりに努める。

※ 評価は5段階（A:十分な成果があった B:かなりの成果があった C:一応の成果があった D:あまり成果がなかった E:成果がなかった）とする。